

## シェフ三瀧の“時事中国語調理の秘訣”

4文字のリズムを作るための道具立ての代表が“为”。様々な程度を示す副詞と合体して複合語となり、その後ろに2音節の形容詞を導いて、全体として4音節のリズムを作ります。

“颇为”“稍为”“较为”“大为”“甚为”など、例には事欠きません。

“为”は、動詞の後ろに結果補語的にも使用されますが(“成为”“变为”“称为”など)、こちらは、動詞の2音節化に役立っています。

“成”にも同じ用法があります。“变成”“建成”“看成”などがその例で、やはり動詞の後ろに結果補語的に使用されています。

似た使い方は“有”にもあります。動詞の後ろに結果補語的に使用され、動詞の2音節化に役立っています。“具有”“含有”などは、日本語でも「具有」「含有」という語があるので無意識的に複合された単語として認識できるのですが、“设有”“位有”になると、日本語には無い言い方で、しかも、中国語は分かち書きをしていないと、漢字が等間隔に並んでいるだけです。ともすればこの“有”をその前の“设”や“位”と結びつけず、後ろにある別の漢字と絡ませて、とんでもない誤訳に走ってしまうのです。

多くの結果補語も、多用されるうちに動補構造の複合語を構成していくわけで、その例には枚挙に暇がありませんが、複合語として完熟しているかの判断はなかなか難しいものです。“到”などはその好例で、そこで離合詞という便利な範疇が必要になるわけです。

